

徳島大学疾患ゲノム研究センターの設立

2008年4月 高浜洋介

平成20年4月1日、徳島大学に新しい学内共同教育研究施設「疾患ゲノム研究センター」が設立されました。同時に、その前身であるゲノム機能研究センターは10年の歴史に幕を下ろしました。新しく設立された徳島大学疾患ゲノム研究センターとはどのような組織でしょうか。また、従来のゲノム機能研究センターとはどのように違うのでしょうか。疾患ゲノム研究センターの設立準備に関与してきたひとりであり、この度、第1期のセンター長に任じられた者として、新センターの趣旨と組織像について概要をご紹介します。

ちょうど十年前の平成10年、徳島大学医学部を母体にして、個体レベルでのゲノム機能学を標榜するゲノム機能研究センターが設置されました。地方大学に置かれた5研究室の小組織であったにもかかわらず、小分子RNAによるゲノム情報制御機構の発見など優れた成果を挙げ、トップジャーナルといわれる Cell, Nature, Science 誌への成果掲載を実現するなど、その強力な研究遂行能力は国内外から高く評価されてきました。また、遺伝子実験施設としてカルタヘナ法の施行に呼応して、全学の遺伝子組換え実験に関する教育訓練及び安全管理について支援業務を提供してきたことも高く評価されてきました。

一方、ここ十年間のヒトゲノムプロジェクトの爆発的な進展は、生物の多様性や複雑さ（いのちの不思議）が遺伝子の配列そのものや数といった古典的ゲノム理解では説明されないことを明らかにしてきました。すなわち、ゲノムの研究といっても、古典的なドグマを越えたゲノム情報制御機構の解明や、個々のゲノム情報制御ユニットが細胞や個体のレベルで統合され生命システムを形成する原理の解明といった、より複合的で高次元の新目標を設定しなおす必要が明確になってきたのです。また、ゲノムの理解を通して何を指すのか、研究指向性を明示する必要性も高まってきました。

並行して、徳島大学として打ち出していくべき研究の特色という観点から、ゲノム機能研究センターを含む研究拠点のありかたが全学的に議論されてきました。折しも、先端的な医療創生を目指した教育研究拠点として、平成16年に大学院医科学教育部、口腔科学教育部、薬科学教育部、栄養生命科学教育部

が結集して、大学院ヘルスバイオサイエンス研究部が設置されていました。ゲノム機能研究センターは、このヘルスバイオサイエンス研究部との連携を一層緊密に前進させ、疾患の克服を目指したゲノム研究を指向していくべきであるとの見解の一致がみられました。また、歴史のある疾患酵素学研究センターとより一層協調していくべきであるとの展望が共有されました。これらの議論をうけて、未来に向けた新目標を設定し直したゲノム研究を通して未解決の病気の克服を目指す「疾患ゲノム研究センター」の構想が培われました。

この構想をもとに文部科学省学術機関課との相談を重ね、平成19年1月の徳島大学役員会にて、ゲノム機能研究センターを改組し、『生命システムを統合する原理の解明とその破綻による疾患の機序解明』を目標に掲げ、『他部局等との共同研究や人事交流の推進等により国際的にインパクトの高い研究を継続して発信する』とともに、『遺伝子実験施設を強化し、全学の遺伝子組換え実験に関する教育訓練、研究支援及び安全管理体制の充実を図る』疾患ゲノム研究センターを設立することが決定されました。併せて、増員による組織拡大も決定されました。

その後の一年あまりをかけて、運営体制の整備や、新分野担当教授の選考など、これまで以上に強力な研究を推進していくための準備が進められ、今般の新センター設立に至りました。またこの間、ゲノム機能研究センター准教授のヘルスバイオサイエンス研究部への配置換えなど、学内部局間の双方向人事交流も開始されました。

こうして徳島大学疾患ゲノム研究センターは設立されました。新任3教授を含めた6研究室体制は若く活気に満ちています。若い力を生かして職員一丸となって、徳島大学のプレゼンスを国内外にアピールしていく研究拠点として、また、大学院生や若手研究者を集め育成する魅力的な研究拠点として、活動を開始いたします。更に、学内外の関係組織と有機的かつ実質的な共同研究や連携活動を推進していくことで、徳島大学発の特色ある国際的かつ先鋭的な研究成果を旺盛に発信していきます。言うまでもなく、遺伝子組換え実験の安全管理や共同機器室の運用など研究支援も学内外との連携にて強化していきます。

新たな時代を拓く気概を以て、思う存分ちからの限り、質の高い研究を進めて参りたいと存じます。若き徳島大学疾患ゲノム研究センターをお引き立てくださいますよう何卒ご支援ご協力よろしくお願い申し上げます。